

～『自分で考え、判断し、行動できる生徒の育成』をめざして～

★『正解のない時代』を生きるための『納得解』とは？★



今までの社会では、明確な課題が存在し、それに対して『どの考えが正解なのか』を求めることが目標とされてきました。しかし、社会がめまぐるしく変化するとともに、多くの人に選択肢や情報が与えられる『多様性社会』になったことで、『正解が一つではなく』になりました。このような背景を経て、『明確な正解のない社会』に生きていく私たちは、『正解かどうかは分からないけれど、自分や自分の周囲の人々の皆がうなずける解＝納得解』を求めながら生きていく必要性が高くなってきました。

実は教育の現場でもこの『納得解』を求める力は重要視され、『アクティブ・ラーニング』という形でその能力育成が図られています。文部科学省が発行している『平成 29 年度版 新しい学習指導要領の考え方』でも、『納得解』を求める能力を個人が養う必要性がはっきりと記されています。『正解もなく、一人ひとりの幸せや価値観も異なるこれからの時代』では、一部の人間だけではなく『全員が考え、悩み、納得解を生み出していく必要』があるのです。

★みんなの『文化祭』こそ『納得解』の出番です！★

ものごとを決めるときに、私たちがついつい採用してしまう『多数決』という方法で『納得解』は手に入るでしょうか？答えは『否』です。『多数に従うべき！少数派なんだから、ダメでも仕方ないじゃん！』では『周囲からの納得』は得られません。

例えば、文化祭のクラス企画を決める際には、たくさんの「アイデア」が出されず。所属する一人ひとりの生徒の価値観は多様であり、クラスの意思を問う方法として『多数決』が用いられるわけですが、この意思決定で行っているのは『少数派の意見の切り捨て』になる可能性があります。また、『多数派の意見には従うべきだ！』という主張は、少数派の意見を抑圧したまま進行することになります。『クラスにモヤモヤが蔓延した状態』のまま、企画を前進させてしまっていることは、運営上の大きなリスクとなるはず。少数派の『モチベーションが下がる』ことも予想されます。また、運営上問題が生じた時には『だからダメだって言ったのに』と批判が再噴出する可能性もあります。



『多数決では否決されてしまう側の人々の意見』も取り入れ、クラス全員が『当事者意識』を持ち、『これが今の私たちにとって、もっとも better な答えである』と合意できることが、何よりも重要になります！

★『最上位目標』への合意形成と『テニス型対話』～★

それでは、『納得解（クラス全員が納得できる答え）』を生み出すにはどうすればよいのでしょうか？その方法として『対話を通じた合意点の模索』が有効だと言われています。もちろん、時間がかかる場合もあります。しかし、『ここは認められるよね』という合意点を見つけることはできるはずです。そこから少しずつ、『最上位目標』に向かってレベルを上げ、議論を建設的に進めるのです。そうすると、その後の納得度の高さがぜんぜん違います。『みんなが一步步合意しながら議論を進めていく』、そのコツさえつかんでしまえば、みんなが『当事者』として『一体感』を感じながら、進んでいけるのです。

例えば、『A案を採用したら誰かがすごく傷つく、B案を採用したらまた違う人が傷つく』という状況ではどうすればいいのでしょうか？どっちを選んでも傷つく人間がいるとすれば『誰も傷つけない別の案を考えよう』と、さらに対話するのです。もはやこれは『テニスのラリー』のようなものです。これを繰り返していれば、より上位にある『みんながよいと思える案』で合意ができるのです。どんなに『対立』が起きても『もう1回みんながOKなものを考え直そう』という考え方を身につければ、いろいろなトラブルが消えるはず。その経験を、学校でたくさん経験してほしいのです。まずは、『文化祭のクラス企画の最上位目標』はなんなのか、そこから『対話で合意』していくことが大切です！『民主的』で、『誰も置き去りにしないこと』をめざし、『納得解』を模索してみませんか？

『何が正解か、誰が正しいか』ではなく、『周囲の納得（共感）を得る』ために『みんなにとってどんな案がよいのか』を考えることとなります。前南生の挑戦に期待しています！文責：星野 亨（教頭）

★校長より★

文化祭が近づいてきました。来校者を招く文化祭は本校では本当に久しぶりのことです。以前のことがよく分からないので、新たに考えたりしなければならぬことがたくさんあると思います。今、前橋南高校にいる皆さん一人一人が考え、合意し、創り出したものが今の前橋南高校の文化祭です。新しく創り出すことはたいへんなこともあるけれども、そのプロセスを楽しんでほしいと思います。たくさん「対話」して、来校者に楽しんでもらえる「皆さんが納得できる企画」を創りあげてください。校長 原 拓史